

氏名（本籍）	カネ シロ アツミ 金城 厚（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	論博音第3号
学位授与年月日	平成15年1月9日
学位論文等題目	論文 沖縄音楽の構造 - 歌詞のリズムと楽式の理論 -
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 柘植元一
（論文副査）	” ” （ ” ） 山本文茂
（ ” ）	” 助教授（ ” ） 塚原康子
（ ” ）	日本大学 教授（芸術学部） 蒲生郷昭
（ ” ）	東京学芸大学 ”（教育学部） 加藤富美子
（ ” ）	京都教育大学 助教授（ ” ） 小林幸男
（学力審査主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 柘植元一
（学力副査）	” ” （ ” ） 船山 隆
（ ” ）	” 助教授（ ” ） 大角欣矢
（ ” ）	” ” （ ” ） 土田英三郎
（ ” ）	” ” （ ” ） 片山千佳子
（ ” ）	” ” （ ” ） 塚原康子

（論文内容の要旨）

この研究は、沖縄音楽の種々のジャンル・地域全体にわたって貫徹する形式的構造原理を明らかにすることを主たる目的とする。とりわけ時間的変化における秩序であるところの拍節、リズム、楽式を扱い、その成り立ちや仕組みとさまざまな変容を議論する。あわせて、沖縄音楽の原理が日本本土の音楽のみならず、中国など他のアジア諸文化の音楽の構造原理と類似する点を取り上げ、日本音楽の中で、あるいはアジアの音楽の中で沖縄音楽を位置づけることを目指す。

本研究の方法論的特徴は、第一に、古典音楽と民俗音楽双方の研究成果を統合する視点に立って、沖縄音楽の全体を総合的に分析する点にある。そのために、単純な様式のジャンルから分析を着手し、そこで得られた理論を古典的音楽にまで敷衍していくことによって、ひとつの音楽文化全体を貫く構造の理論を構築していくという研究手順を採った。

第二に、旋律やリズムそれ自体の観察から出発するのではなく、歌詞と拍節との関連において旋律も楽式も捉えていく。とりわけ「字の配分」という考え方を中心とした。

本研究の主要部分は第三～五章である。第三章では沖縄諸島の音楽を論じた。まず、本土との基本的な差異であるオフビートリズムを論じた。沖縄のわらべ歌は、本土のそれと著しく異なり、オフビートで終止する曲が半数以上である。また、口説などの七五調ではフレーズの終止部分に

間がなく、終止感がはっきりしないなど、本土の七五調によるリズムとは大きく異なる様相を確認した。

次に、沖縄諸島の神歌の中に、沖縄音楽の楽式構造の基礎である「五音単独型」の歌詞配分リズムを見いだした。二小節四拍から成るこの旋律単位を「節片」と呼ぶ。楽式は、最小単位の節片が対楽句の形成を契機として前後2つずつ連なり、楽節 大楽節 楽段と発展していく。琉歌形式の歌曲ウシデーク歌では、節片・楽節などの旋律単位の歌詞配分リズムが2倍の長さに拡大する場合があります、また、拍の脱落や音価の伸長、変位などの変形や、前節片の歌詞配分リズムが後節片になる倒置などの現象が加わって、多彩な歌詞配分リズムが作り出される。

第四章では八重山・宮古諸島の音楽を論じた。まず、八重山諸島のリズムには拍の伸縮が顕著である。ここでは前拍が伸びる傾向があり、前拍が2倍にまで伸びた結果、三拍子が生まれたことを論証した。八重山民謡の楽式の基礎は二元的対称性であり、これは対句・対楽句・交互唱の3つの側面に現れている。これがさらに三楽句構成へと展開していく。

宮古諸島の歌には長アークという非拍節な長ブシがある。これらは早ブシの歌詞配分リズムを基礎としながら、これを拡大、伸長し、長い接尾字を挿入していくことによって、朗々たるフレーズを展開させている。このことから、非拍節のリズムの楽曲でも、実は拍節的リズムの構造を暗喩としている場合が少なくないと推測する。早ブシにおいても、八重山のユンタなどに比べてより新しい自由な展開、自由な言葉の表現を見せている。

第五章では古典音楽を論じた。歌三線の曲は、拍節が二拍子または四拍子を基礎としている。四拍子の各拍には、第一拍：安定、第二拍：弛緩、第三拍：安定、第四拍：緊張、そしてまた第一拍：解放（安定）という機能がある。

前章までに提示された歌詞配分に基づく形式原理は、古典音楽曲においても一貫している。標準的な間合いを「本間」と呼び、2倍に拡大された構造を「長間」、さらに4倍の構造を「大長間」、逆に、本間を半分に縮小した構造を「早間」、4分の1の構造を「半間」と定式化した。しかし、これらの基本的構造は、楽節の中央部から伸長や部分的な拡大が起こり、両端から音の縮小や脱落が起きることによって、次第に変形していき、さまざまな一見不規則な配分を作る。

最後に中国とインドネシアの音楽理論の一部を検討して、そこに見られる楽曲展開の原理が沖縄の古典音楽のそれとよく似ていることを指摘し、アジア的規模で音楽理論概念を共有することの意義について問題提起した。

本研究の結論を集約すると、次の5点に帰せられる。

- 1) 沖縄音楽の形式的基礎には歌詞の五音を音楽の四拍に配分するリズムがある。
- 2) 形式を発展させる原理として、対称性の原理がある。これにより、楽句は階層を追って倍加していく。
- 3) 旋律を発展させる原理として、拡大の原理がある。これにより、旋律は密度を高め、大規模で技巧的な楽曲が実現される。
- 4) 沖縄音楽では、神歌のような単純素朴な歌から技巧的により発展した世俗歌曲、さらには芸術的に洗練された古典三線音楽に至るまで、一貫した形式原理が認められる。
- 5) 沖縄音楽の構造原理は、アジア的普遍性を持つ可能性がある。